

吉田 裕著

バタイユ 聖なるものから現在へ

バタイユ没後五〇周年を飾るにふさわしい、充実した研究書(モノグラフィ)の登場である。著者の吉田裕は、長年にわたって、日本でのバタイユ研究を牽引してきた重鎮の一人であるが、バタイユという作家・思想家の活動の「全体」を見ずして書いた本書によって、今日まで日本に流布していたバタイユ像のいくつかを確実に更新してしまっ

た。バタイユのテキスト群を前にしたとき、しばしば迷宮という比喩が使われるが、私見を言わせてもらえば、むしろ繁茂する混沌、つまりはジャングルの方が

「このバタイユの『全体』ほど複雑怪奇なものがあるだろうか?」と認めた上で、樹海の中に颯爽と踏み込んで行く。著者の足取りは超人的である。足もとの泥濘や腐敗した死体たちが堆積した土壌の上を、通い路を歩むかのような足取りでやわらかに進み、枝から枝へと樹々を危なげなく飛び移っていく。そして、移動の途中で足を止め、樹々の生育状態を一本一本確かめ、それらの互いの照応関係を調べ、密林全体の成り立ちを兵時的、通時的な観点から解き明かしていくのである。

吉田の常人ならざるジャングルでの機動性とその知識は、生涯をかけてバタイユという樹海を日々歩き続け、思索を重ねてきた経験のおかげである。「風の谷のナウシカ」の原作版の方には「森の人」という瘴気あふれる腐海を住処とする知者が出てくるが、言わば吉田はバタイユというジャングルの「森の人」なのである。

その結果として、本書に

学術思想

更新されるバタイユ像

「禁止と侵犯」の思想家から「衰退」の思想家へ

福島 勲

は、さまざまな美点が備わっている。たとえば、前半部分は、バタイユの誕生から、初期、円熟期の第二次大戦中から戦後にいたるまでの錯綜した道のりを、丁

ば、前菜程度のものでしかない。本書の最大の意味は、「禁止と侵犯」の思想家から「衰退」の思想家への更新にあるか

らだ。この刺戟的なテーゼは、単なる思いつきではな

い。これを論証する際、吉田が依拠するのはいずれも、密林で

あり、密林でワックから根だけでなく、最終的に「至高性」を構想し

た。さらに、第二の軸。バタイユの思想的発展は、先

のフィールド「二一チエからヘーゲル」でなく、最終的に「至高性」を構想し

た。さらに、第二の軸。バタイユの思想的発展は、先

のフィールド「二一チエからヘーゲル」でなく、最終的に「至高性」を構想し

た。さらに、第二の軸。バタイユの思想的発展は、先

のフィールド「二一チエからヘーゲル」でなく、最終的に「至高性」を構想し

「ゲルから二一チエ」として現れると吉田は言う。簡

定説だが吉田は反対に「二一チエからヘーゲル」と

移動したと読む。実際、バタイユの活動は、経済学、

宗教、エロティシズム(文藝)という三領域に大別す

る。この領域に大別する最大の意味は、「禁止と

侵犯」の思想家から「衰退」の思想家への更新にあるか

らだ。この刺戟的なテーゼは、単なる思いつきではな

い。これを論証する際、吉田が依拠するのはいずれも、密林で

あり、密林でワックから根だけでなく、最終的に「至高性」を構想し

た。さらに、第二の軸。バタイユの思想的発展は、先

のフィールド「二一チエからヘーゲル」でなく、最終的に「至高性」を構想し



A5判・518頁・6930円
名古屋大学出版会
978-4-8158-0713-9

★よしだ・ひろし氏は早稲田大学教授。著書に「バタイユの迷宮」「二一チエの誘惑」「詩的行爲論」「幻想生成論」など。一九四九(昭和24)年生。